

Pj-064-4 パーキンソン病の骨密度、体組成と嚥下障害の関連性の検討

○浅野 友梨¹、伊利 孝宣¹、川添 僚也¹、木田 耕太¹、原田 明子²、
神足かおり²、櫻庭 佑香²、青山 有紀³、松田 千春⁴、齊藤 勇二¹、
清水 俊夫¹、高橋 一司¹

¹ 東京都立神経病院 脳神経内科、² 東京都立神経病院 リハビリテーション科、

³ 東京都立神経病院 栄養科、⁴ 東京都医学総合研究所難病ケア看護ユニット

【目的】パーキンソン病(PD)では骨粗鬆症の合併が多く、体重減少、糖・脂質の代謝変化も生じる。嚥下障害、代謝変化と骨粗鬆症の関連について検討した。【方法】嚥下障害の疑いのあるclinically established, probable PD患者の連続29名(男性16名)を対象とした。骨塩定量(DEXA法)、筋肉量、体脂肪率(Inbody S10)を測定した。嚥下機能は、日本摂食嚥下リハビリテーション学会による手順(2014年)に準拠し嚥下造影で評価した。検査食は硫酸バリウム液の希釈原液、増粘剤加液、ゼリー、粥で行い、その平均値を用いた。運動機能、非運動症状の評価をMDS-UPDRSで行った。以上から得た骨密度、体液量、嚥下機能およびPD症候の関連性を、Spearman順位相関係数を用いて解析した。【結果】対象の検査時年齢の中央値76.3歳(IQR 72.0-81.8)、罹病期間7.3年(3.8-12.0)、Yahr分類3.0(3.0-4.0)、骨密度の若年成人比較(YAM)%腰椎78.5%(68.4-100.1)、大腿骨69.4%(61.7-88.0)であった。腰椎骨密度は男性で高く($r=0.462, p=0.040$)、筋肉量と相関していた($r=0.608, p=0.007$)が、嚥下機能、体脂肪率、検査時年齢、運動機能、姿勢保持障害とは相関がなかった。大腿骨密度はいずれとも相関がなかった。男性で筋肉量が多く($r=0.780, p<0.001$)、体脂肪率は低かった($r=-0.506, p=0.008$)。体脂肪率は起立性低血圧・幻覚と負の相関があった($r=-0.468, p=0.028$ ・ $r=-0.517, p=0.019$)。検査時年齢は筋肉量と負の相関があり($r=-0.634, p<0.001$)、体脂肪率とは相関がなかった。【結論】嚥下障害と骨密度には関連がみられなかった。腰椎骨密度は男性・筋肉量が多い患者で高く、一般人口と同様にPD患者においても、女性・筋肉量減少は腰椎骨密度低下のリスク因子と示唆された。低い体脂肪率と起立性低血圧・幻覚の関連は、PDの体重減少や代謝変化に対する自律神経障害や大脳皮質病変の寄与を示唆した。